



洋学文庫  
文庫 8  
C 269  
1





泰西七金譯說卷之一目錄

鑄金之部是將多條連說辭不用音畫法去

總論精煉金鑄赤紅色顏料法

切德哥熱金鑄之去

製純金法共三法

銀器上鑲金粉分量法

製顏料金粉法

不假火力鑲金於銀器上法



添器生光澤水藥法

添色金為黃色法 共二法

古廢金器解色法 共三法

精潔金器珠玉法 共三方

復金筈綠金繡之色法

燒筈綠取金銀法

鎔化金銀簡易法及移動鑪罐不附着壺底法

重金量法 雜錄卷之一 目錄

製金泥法 共二方

紙草上設金色書畫法

用金染硝子為血紅色顏料法

添錢為金色法



興金部志 共二七



泰西七金譯說卷之一 撰り 馬場貞由 譯述

固より 濟 滙 江 虬 監 試 馬 場 貞 由 譯 述

愕 烏 多 堤 譯 金 總 論 因 金 部 志 撰 り

金ハ 羅 甸 語 呼 て 亞 烏 略 木 と 云 ぶ 黄 色 小 して 光

澤 向 り 諸 金 の 長 と 以 純 精 な る 物 以 重 貴 の 寶 と

を 質 堅 硬 小 して 最 巨 重 小 して 打 ち 延 小 可 小

此 と 以 諸 金 の 長 と する 所以 ハ 質 精 密 小 して



能く煉熟合體して或ハ煨化し或ハ木となりて  
他の諸品中ニ交和せると雖も其質を変ずること  
なし而其諸品中ニ交和せらるも猶ち其性を製し  
て再び初元の如くニ集り寄る可し又他の諸金  
の如く火力水勢空氣等ニ因て消滅するることなく  
固より腐敗し或ハ錯る等のこと絶て無き故なり

金其貴重なるの所以斯の如し然きとも大凡か

人間の用成るを以て論ずるときは最も無  
益の物にして諸金の長は何らす雜金の内はか  
ふ可き物なり何と云ふは若し人黄金と貴き物  
とせず暫く金貨の通用及び金色の飾り成廢し  
て其有用ある所を他の諸金と比較せし実は金  
ハ人間ニ無用の物にして遙諸金の下ニ位せし  
む可き物あり其時に至て諸金の中別て錢の如  
きは最も人間の有用の物にして暫くも此成廢



く可らず最も貴重を可き物なり然るとも此ハ  
世小夥しく何るは因て人抄巻程の貴き物と思  
ひざるなり即家用薬用とあるその多きを以て  
論をこれハ錢を以て諸金の長として可なり

金ハ最も堅硬なるに因て火力以防保するに諸  
金ハ勝まさり故に純金ハ幾久しく烈火中ハ投  
し置くと雖も其量目少く減少するところハ勃ホ爾ル  
利リ曰一兩錢ハの金取て二箇月の間晝夜火

を消除せしむ無き硝子竈の中ハ納き置きしに  
其量一厘も減せを覺たり金ハ他の諸金の如く  
人術を以て設きたる火力にてハ速に鎔化し且  
其量の軽くなるに至らざるも甚と大ある  
顯微鏡を以て日輪の火気を取り此ハ當ると見  
ハ其量少しく軽くなり且速に鎔化を此を分木  
別ル孤ル欲ルある者嘗て試定發明する所なり  
金ハ諸金の中ハ於て最も能く長く打ち延不可



一且無量の精微は分離を可し即銀一筋の中も  
金一厘を加へ混和せしむるは其銀處として金  
の微體普く平等は交和を有らざるは無し  
勃がひ烈レ人曰曾て一厘の金取て薄く打ち延ハ  
せしむ七寸方は延むよりと此以て考ふれば  
人乃恒は一ギ方ト止餘銭の名徑一分於打延ハせ  
ハ一騎馬取貼金を可しといへる俗語怪み奇と  
するに足らざる又嘗て重さ一兩錢ハの銀は金ハ

厘取加へ此を以て絲を造りしは一十三百尺と  
なり而其絲の處として金の至らざりしハ無し  
王學校按王即拂郎察州なる千七百十三年我正徳  
巳の記録は曰重さ一兩錢ハの金を打延ハせし  
ふ長さ十九萬五千尺の絲とある則ち是は拂郎  
察国の里法に直せば七十三里倍註尺は二此一里  
と定ありと此を實に驚愕を可き大数ならざる  
んや金の重きとハ他の諸金は勝るれをなす



尚諸實體を以て物皆此と衡域等なる物な  
し是故実測せんと欲ハ共ニ同寸方ニ切斷し秤  
ふかけて比較を可し又水銀を投入して此を  
知る可し他の諸金ハ皆上ニ浮免とも獨り金の  
こハ其中ニ沈む金と水と其重さの差ハ一と十  
九の如し即金ハ水より重きを十九倍を  
蓋し金の諸金石よりハ重なり其所以ハ質の最密  
ある故なり然れども亦れも猶氣眼何れ何と

るれハ弗魯連的印地名あり一儒家金丸ニ水と入  
き口を鑄て固封し螺螄ナメコ轉成以て其を締めし  
は其水外ニ透徹し漏きたりとあるあり  
金を燒き其中ニ炎熱火氣成含み留むるも他の  
實體物中ニ含み留まりたりハ大母久し且其  
火氣甚し此亦質の密実なり所以あり金と火  
ニ假に其鎔和せんとすると此ハ自の光輝甚  
きありなり又火となして後其易く鎔化する



と殆ど鉛の如く銅の鎔化を速くしハ速なり既に  
鎔化をくくると凡ハ毎リ色変して海綠色と成  
るなり

諸金と合せて能く混和し水銀とハ最も能く和  
まるなり銀を以て日鎔化を精潔するに此を用いて精  
潔とありと鉛と銀の如く又凡ハ此を用いて精  
金を解化する液汁ハ王水なり強水を用いてハ解  
化せむも此ハ鹽の精気を加へると能く解

化を成り此等の液汁を以て鎔化を成る金  
鑪蓬鹽精を加へて地中を埋置置れり是は自  
ら熱気或ハ火氣を催すと凡ハ自らの雷鳴の如  
き音を成り空中に飛彈し其物に撃たれ勢大砲よ  
り放つ大茶よりハ勢ハ尚甚なり其勢の大茶よ  
り勝ると十六倍を成る日金鑪蓬鹽精ハ  
或製煉家の説に曰金ハ皆精潔する硫黄と一種  
自然に塊凝りて水銀と相和し成る物なりと



此を唯其色成見て窮理をこのなり然るも  
此説是なりとん可し実其色ハ硫黄の色と思  
つゝあり即諸製煉家曰金より硫黄を製し取  
る可し硫黄成取り除きたる其金ハ皆白色とれ  
る此白色となりし金の分量厚と銀を取て是  
ハ右の硫黄を交和するときは其銀忽ち金小変  
まると又曰金の内ハ必水銀混交あり若し此  
小水銀混和ありさると死小更ハ金ハ鎔化を

可らざる物あり既に術を以て水銀成塊凝  
せしめ此ハ金より製し取りし硫黄を加へ混  
交するに堅実あり純金となりしを烈火或ハ解  
化液按ハ玉水強と云を以て此成解化せしめんと  
きとも全く鎔解するを固より其合せたる  
二品猛火を以ても各別小分離せると又曰硫黄  
水銀の二品ハ嘗ハ金の之あり其多少あり  
いへとも皆他の諸金とも混交ありあれは因



て諸金共小皆堅硬の質あり又火力を以て柔軟  
かりきむ可くと自註曰此硫黄と云ふす一焼消  
の冷烟凝嘔硫は石にて羅甸語大建城さて又奇と  
を可きハ常の水銀で鎔化志々鉛の蒸気中  
ると此ハ水銀忽ち塊凝を金も亦此蒸気中  
るときハ自から脆くなりて取り扱ふ可らざる物  
とあるなり一説は右小云ふ一種の硫黄阿基ハ  
黄金及諸金以製し得べきなりと云ふ此説ハ人

聞て臆説ありと云ふ者あり又実理なりと云ふ  
て信する者もあり爰ハ金城製造せず確證あり  
古トハ波羅泥亞の国王アウキユステスなる者の  
世ハ銀を以て製金法を知る某の一人阿基王此  
者ニ命じ之數萬金を製造せしめしりと蓋し此  
者ハ其製造法を知する由来ハ其幼年の頃ベル  
シイニ地なる合茶師ハ從ふ其合茶法を學べ  
り然るに其師と確執をなす遂ハ此所を退き彼



き此れと時日と移して壮年の頃に至る然るに  
或時不図一家の製茶師と見へて再び又おまじ  
随従して後大に其師に勤めしに因て師を亦大  
に此者を親愛を師遂に病のため伏し自切し  
其死症たるを察知し此者に向き曰予は病治  
を可らず汝恒に我を扶助し親懇を盡せしを淺  
切しを故に汝に遺留物を與へん予死したるは  
室中なる小箱を開き見る可し茶品と短文

有り汝は是を與ふ可し汝其茶品を以て短文を  
載する法の如くにするは大利を得へしと師遂  
に死せし故に其遺言を任せし一室を開き見る  
に一小箱有て其内は瓶と短書あり其書はハ瓶  
の茶品を以て黄金を製造するの法を載せしり  
故に此者喜悅するを少切しす取し何ん試し  
此を以て製造するに其傳の如く真金を製し得  
たり其後専ら金を製し夥しく利を得るに隨ひ



漸く其名世に知れり然れども誰とて此法  
を知る者なく又工夫をなす能はざれば人ハ唯  
こゝに聞て羨むのに然るに此者の幼少の頃ハ  
使へり「ベルレイ」地の先師其高名を聞き求り  
此者に向き試み先つ「ラトビス」ヒロクホリの  
功を問ふ共論して後又諸金の義論を移轉し  
互に激論をなす就て不図誤て金を製造を可き  
法ありと云ひ出せり師これを聞て曰汝ハ虚談

空言哉云ふ者なり金ハ自然天工の物あり豈  
金を製造し得るものやんや吾其空言なるを知  
る若し然らばんハ吾も此法製造して見を可し  
と大に結問せられしに依り此者一ハ其空言  
といわれし鬱憤をなすらんや爲免一ハ其妙  
法哉知るや云ふの慢心を去りて直に其師を已  
まき製煉所を伴ひ行き一片の銀を以て忽ち金  
を製造して見せしめ且ち是れを真偽を定めんや



為免一家の金匠に送るべきを監定せしむる金匠  
曰此を最上品純金ありとありし因て先師俄  
に此者に尊親して曰先年乃如く吾宅に來て宿  
し給へと乃遂に共に先師の宅に行きて其夜此  
に宿せり此者卧して後竊に閨中に於て思ひら  
く我は此製金法に他は傳へあるを我に利益少く  
若し又此法を師に傳へるとんハ師我に害せん寧  
明日早朝に爰を出走せん此を勝まりと云ふに

決定し遂に翌日未明に爰に出走せし先師ハ其  
朝此者の久しく閨房より出て來らざりて怪に  
若し之ハ疾病不例の事と云ふんと竊に其閨  
房に窺ふに其人走て居を故に夫に驚死直に人  
を以て彼より以前に在りし家を探問せしむる  
小彼れハ今早朝に何處へ行く者と云ふ此に  
於て先師大に怒り速に其所在を探索し此者を  
捕へ引き戻らんとす其地の有司に請ふ故



よ有司を以て人城走らざりしに時刻漸く移りた  
きは追手の者速く追ひ着くと能はず遠くデ  
スデ<sup>地</sup>の市門の際にてあまに逢ふ直に此を  
捕へて嚴しく警めりデレスデ<sup>地</sup>の人其追手の  
者に向ふ彼まう罪城問追手の者あまは實を以  
て答ふ其地の人彼まう罪の僅るるに因て大を  
城慈に其始末を国王アウギスに告多訴ふ王こ  
ま城聞て其者召し目許は於て其術と試む然

るにあまは世よ多き偽金匠と異よして真術純  
金城製造せし故に王直に此ま城高位に進め大  
祿を與へ夥多の金城製造せしめりりと蓋し後  
ハ其種とるを一味用ひ盡して製金城廢せり  
ま城廢せし頃ハ皆人疑ふて曰彼ま城懶り其  
製造を廢止せしと故に強てあまを製造せし  
んとて後漸く其実顯りて王も亦あまを許せり  
此者ハ製金術の外に一法ヲクシセボルセレイ



一按一種の成創製せり即今も世に専ら行  
る其功の多きを以て製金の成廢止せしむる  
も猶其利成與へ置る事と知り即往古金を製造  
せし確證斯の如くテラフラスエハラセルエ  
人の著書も製金の説成載を此他金を製造せ  
しとあり志すハ諸書を見へし然るも各其  
れを秘せし故に世に傳ふ事と知り嘗て此法を  
發明せんと意を注ぎ思成勞せし者世に數多し

且然りと雖とも其実よ及ぶ者更よるく既よ一  
人此法を探索發明し得んとして苦難の業をな  
し且大を爲る多財を散し終よ吃食となりし  
者あり又「人エス」と云ふ者あり九十八歳よ  
て蘇亦齊の病院に卒を此者末期に至り世に我  
の敵とすそのハ製煉術なり既よ吾も此齡に  
至るまで製金の法よ意を勞せし雖とも其功な  
しといへしと知り斯の如く此法を發明せんと



意以注く者ありといへとも未とあき分明なり  
ぞなり

予ハ製金の法を知らざるも獲金の術或知る  
凡誰とれく商買る事は交易賣買の道ハ所ニ工  
人あり其工術ハ意を用ひ農民ありハ耕作ハ  
怠らす各其業を励む可く自う多く金の或得  
るあき予ハ獲金の法あり

羅甸語にてハ金の通名を「アウユ」と云ふ製煉

家にてハ此ハ種々の異名を附を即此ハ「ブル」  
「ユル」  
「ユス」  
「ベウ」  
「ホモ」  
「セキ」  
「ス」  
「ヒリ」  
「ウス」  
「ソ」  
「リス」  
「ユメ」  
「マユ」  
「ス」  
及「ベル」  
「メ」  
「ユム」  
「ユフ」  
「ユム」等  
の名あり皆此を其黄色なる或以て命名せし物  
なり然きとも波陀米垂の内「プラ」  
「グ」と云ふ所  
ハ白色の金或産するなり或曰金の黄色なる  
ハ製煉家の法術を以て或ハあき或除去し或ハ  
再復染色を可しと



金の数品あり或ハ銀銅の類多く混和したるあり或ハ少く混和する物あり混交したる物の多少は因て其品類は異なりす鑄金銭行及金匠にてハ必も金ハ他物を交へ他物は交和したるは柔軟より取り扱ひ易き故あり

監定家<sup>エサキ</sup>及金匠ハ金の品位を定め各くるにカラ<sup>ア</sup>上の語<sup>以て</sup>を<sup>名</sup>註<sup>一</sup>銀<sup>之</sup>日<sup>三</sup>カラ<sup>之</sup>ア<sup>上</sup>とハ<sup>分</sup>量の<sup>云</sup>ふ<sup>の</sup>假令ハ他物の少も混交せざる純金ハ此を二十

四カラ上の金と云ふ又其金の二十四分之二銀銅或ハ他物混和したるハ此を二十三カラ上の金と云ふ又純金四分之二ハ銀四分之二銅四分之一混交するハ此を十二カラ上の金と云ふなり斯の如く混交する物の多き程カラ上の数の減し唱ふるなり其カラ上の数を定め得るにハ試金石を用也尚精密は此を査者して其位を定めよハ別は監定家に法術あり



り

製煉家<sup>ニ</sup>於てハ九也金<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>類<sup>ニ</sup>分<sup>ツ</sup>其<sup>一</sup>ハ金  
鑛<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>附<sup>着</sup>したる<sup>ヲ</sup>術<sup>以</sup>て鑄<sup>ク</sup>取<sup>ル</sup>物<sup>ヲ</sup>  
其<sup>二</sup>ハゲデーゲンブウト一名<sup>コ</sup>ーグデング  
ウトと名<sup>ク</sup>此<sup>ハ</sup>素<sup>ク</sup>り精<sup>純</sup>して混<sup>交</sup>志<sup>ス</sup>  
物<sup>ヲ</sup>直<sup>ニ</sup>採用<sup>ス</sup>可<sup>キ</sup>物<sup>ヲ</sup>其<sup>色</sup>黄<sup>ニ</sup>紅<sup>ヲ</sup>帶  
ひ<sup>ク</sup>物<sup>アリ</sup>

金ハ諸國<sup>ノ</sup>山中<sup>ヨリ</sup>掘<sup>リ</sup>出<sup>ス</sup>即<sup>チ</sup>亞細亞洲<sup>ヨリ</sup>

ハ亞刺皮亞支那日本暹羅甘波亞滿刺加瓜哇須  
瑪太刺アセムナリパ<sup>ラ</sup>及<sup>チ</sup>此<sup>他</sup>ノ諸國<sup>ヨリ</sup>も<sup>アリ</sup>  
但<sup>シ</sup>此<sup>諸</sup>列<sup>中</sup>ヨテハ支那<sup>ノ</sup>最<sup>モ</sup>多<sup>ク</sup>産<sup>ス</sup>然  
速<sup>ク</sup>も銀<sup>ハ</sup>此<sup>地</sup>ノ少<sup>ク</sup>故<sup>ニ</sup>支那人<sup>等</sup>ハ反<sup>テ</sup>銀  
と尊<sup>ミ</sup>金<sup>以</sup>て銀<sup>と</sup>交易<sup>セ</sup>んと成<sup>存</sup>む亞弗利  
加洲<sup>ヨテ</sup>ハ為<sup>匿</sup>亞<sup>ヤ</sup>の中<sup>ノ</sup>ゴウトキ<sup>ス</sup>ト及<sup>チ</sup>麻打  
葛失加<sup>ル</sup>嶋<sup>ノ</sup>産<sup>ス</sup>を亞墨利加洲<sup>ハ</sup>金<sup>ヲ</sup>産<sup>ス</sup>る<sup>處</sup>  
最<sup>モ</sup>多<sup>ク</sup>即<sup>チ</sup>智里墨斯哥<sup>伯</sup>西兒<sup>マル</sup>カ<sup>ボ</sup>バルド



イナ<sup>ポト</sup>ン<sup>ン</sup>李露の中なるグイ<sup>ト</sup>及此他の諸地  
にも産を伊斯巴泥<sup>亜</sup>より毎歲此諸地<sup>に</sup>數船を  
致して夥多の棹條と<sup>な</sup>る<sup>る</sup>金と買ひ求<sup>乞</sup>て  
本国<sup>に</sup>運送を又歐羅巴<sup>にて</sup>ハ蘓亦齊諾<sup>ル</sup>勿入  
亞翁加里<sup>亞</sup>。<sup>に</sup>産を右四大洲の諸国<sup>ふ</sup>て其<sup>夥</sup>く  
く産を<sup>る</sup>處ハ亞刺皮亞支那李露及<sup>ハ</sup>翁加里<sup>亞</sup>  
等<sup>なり</sup>右諸国の金の中<sup>にて</sup>歐羅巴<sup>の</sup>産ハ總て  
色濃し又亞墨利加<sup>の</sup>産ハ色<sup>淡</sup>く白色<sup>或</sup>帯<sup>ひ</sup>と

り一説<sup>は</sup>麻打葛<sup>矢</sup>加<sup>爾</sup>及<sup>ハ</sup>滿刺加<sup>の</sup>産ハ共<sup>に</sup>  
色<sup>淡</sup>く白色<sup>或</sup>帯<sup>ひ</sup>と<sup>る</sup>鎔化<sup>し</sup>易<sup>き</sup>と<sup>殆</sup>と<sup>鉛</sup>の如  
いと云ふ

金ハ元<sup>と</sup>皆<sup>一</sup>種<sup>の</sup>土石<sup>の間</sup>に筋<sup>様</sup>をか<sup>して</sup>附  
着<sup>する</sup>物<sup>なり</sup>其<sup>時</sup>の色<sup>ハ</sup>種々<sup>有</sup>り<sup>と</sup>雖<sup>も</sup>  
總て<sup>ハ</sup>灰色<sup>或</sup>ハ黄色<sup>なり</sup>物<sup>多</sup>く<sup>淘</sup>金<sup>戸</sup>等<sup>此</sup>と  
取<sup>て</sup>洗<sup>ひ</sup>灌<sup>き</sup>末<sup>に</sup>搗<sup>き</sup>火<sup>に</sup>煨<sup>て</sup>金<sup>と</sup>土石<sup>と</sup>  
以<sup>て</sup>分<sup>離</sup>し<sup>而</sup>後<sup>皆</sup>水銀<sup>の中</sup>に<sup>投</sup>入<sup>して</sup>集<sup>め</sup>一<sup>體</sup>



より多くある若し又此は銀或は銅の類混交した  
るときハ分離液或ハアインチモニイを以て此は  
分離志く精純の物となり

世界の諸州は金を産する江河處處に在り其處  
ハ都て山城距ると遠くす曲流とある其所乃  
砂中に在り其金皆火力を以て鎔化を可し歐羅  
巴洲にて金を産する河ハ「イニドナウ」アル  
「ロ子」及び「ル」河等なり亞細亞洲にてハ安日

河は在り亞弗利加洲にてハ「フウトキエス」の「ホ  
ル」河は在り亞墨利加洲にも亦處處に在るな  
る此諸列の外ハ又純砂金を産する河あり此砂金  
ハ稀は豌豆の大きさある物ありと雖ども總て細  
粒あり皆砂石と混交しより此を採るにハ其砂  
と共に取る水は灌き而後ハ擇み分つ但し此を  
製し取る所の失墜ハ製し得る所の金より反て  
大なる故に此を製し取る者も古くハ河



産の金を以て製造したると云ふ金銭を見たり  
此ハ「ヘスセン」地の炭第六世の「カール」の代  
其国中ある「エッテル」といふ河乃砂中より取り  
たる金を以て造りたる物なりと名を或曰「亜弗  
利加」の土俗ハ恒ニ河底ニ潜ミ至テ砂中より夥  
多き粒金を拾ひ取ると

所謂「ゲデーゲンゴウ」の前一種の金ハ時として  
「クワルツ」石及其他の石内ニ在るとあり其石内

取テ碎テハ内ニ黄色の細粒あり蓋シ金塊含ミ  
たり石ハ質都テ軟柔ニシテ利刀以テ切リ可  
ク又其面ニ易ク線ヲ引き設ク可ク凡物多ク凡そ  
金塊含ミたり又否らざるを知るの法あり  
則其石を取テ水銀の蒸氣ニ中ル可シ金含ミた  
るハ忽チ色變シテ白色トアル事此の有無を  
知るの顯徴なり翁加里亜の「カルパチ」山ニ柘榴  
の実の如き紅色の小石あり此内ニハ皆金塊含



こたり又東国より来る「テュールス」按色  
の珠玉あり産刺皮の内にも金あり皆筋様とふ  
あり

或曰嘗て翁瓦里亜の山中に生せし葡萄樹より

金成製し取るとあり蓋し此ハ其幹の内ハ  
筋様をふし又其実中ハ粒をふしてありしと

又「ホレル」按て紅魚名あり此魚ハ鱗最も小  
肉ハ  
の清水の中に住む魚ハ山中より流れて食料とす最

の頭中ハ粒金ありとありと若し此ニ説共  
ハ眞実の事なれば甚と珍事とす可し

歐羅巴諸国の金銭にて翁瓦里亜及ヒケレムニ  
各地の通用銭の「マリイ」人の像を刺する物  
と並ニ和蘭の通用金銭を最上品とし就中和蘭  
の金銭ハ最上品とす此ハ皆東印度の諸国よ  
り買ひ求めたる金成以て製造するなり此ハ  
物ハ伊斯巴泥亜の通用銭なり此より劣る



物ハ諸尼利亞の錢なり拂郎察国通用の錢ハ其  
品最も下る總て金銀共ニ其純駁ニ因て位品を  
異ニシ好悪成るを有り又ラハ混交する物の  
多凡程軽く柔て且脆くたゞて色も亦白く或ハ  
赤くあるなり

功德

金の大徳ハ人皆知るる如く交易賣買ニ用ひ此  
を以てハ各欲する所の諸物成得る故ニ天下の

人此成好まざる者ハ如く金匠ハ此を以て種々  
の要器或ハ飾とるす品物を造り金箔匠ハ此成  
以て銀銅錢鉛錫木石皮紙ハ貼して真金ニ紛ふ  
物を造り又絲とたゞてハ繡刺ニ用ゆ此他奉て  
算ふ可らむ  
又金箔成磨し金泥を製し画家の用となす又紅  
色の玉石を偽製するに此成加ふ最も美麗の紅  
色を得るなり



茶用よなしてハ功るゝ古へ製煉家よて一種の  
金色漆汁アウユムポタヒレと名て賣茶  
とあり萬病も此アウユム用ゆまハ治まると言はん  
如く数多の功能を書き記せり然るに近世よ至  
て漸く人其寸功なきアウユム知りて今ハ既よ全く廢  
まり豈金人體よ入て細密微塵よ鎔化し血液と  
混和まるとありんや況んや其功をなすことアウユムに於  
ておや其腸胃よ入るとアウユムハ反て害アウユム生を可し

金アウユム加へ製まアウユム茶品よ能く功と頭を物あれ  
とも此ハ金の功よ因てゑす所よありんアウユム全く其  
合茶の功あり故よ金と交へ製まアウユム茶渣の其金  
を除きて製し此アウユム用ゆるアウユム其功少も違アウユム日さアウユム於  
なり  
心アウユム強盛よるアウユム一種の散茶よ金箔を加ふる法  
あり然まとも此ハ強心よ功をあアウユムす 觀見ミタ乃  
矣アウユムあをのアウユム丸茶等よ貼したる金箔も皆然り



曾て人の金ハ大功有る物と信用せらる其起因ハ  
全く古語ニ謬言ある故以てなり即曰黄金最可  
貴重也加茶劑亦甚有奇功也此世世俗専ら茶  
用とせし始めし所以なり造物主ハ必を金故茶  
用ニ充てを全く他の用ニ供せしむらん  
又「ドンテレンデコウ」ト名て金粉を主として  
製したる茶汗の茶劑有り功最も少く故に今時  
ハ用ゆる者少く但し水銀劑の吐涎茶故過度用

ひ其吐涎故止むるハ良し此候ニ用ゆると記  
ハ金體內ある水銀の氣を聚免寄せ共ニ一躰と  
なりて下連ハなり若し人誤て水銀を吞ミたる  
と記ハ口中ニ金故含む可し其害故免る但し其  
含ミたる金ハ忽ち白色ニ変を可し此連水銀金  
故志とも相聚り自ら此ニ附着するを以て  
似り斯の如く水銀ハ物故透徹貫通して金を  
とる物なり



左ノ金成以て種々製造法を説く先つ最初ノ純  
金を製する法成載を

製純金法

金成純精ノ為さんと欲せハ先つ其量目とかけ  
改め此成鑪壺ノ投入ノ武火ノ上せ而して其投  
入志する金の二三倍も搗きて粉末と作り  
たるアニチモニヤ成加ふ可し金速ニ鎔化を此  
と煮ると其化金の自うら光輝を生し成発を

る成度より而後ノ火より下ニ化金の能く壺底  
ニ沈むより少く鑪壺成動揺を可し能く冷  
へたりハ其鑪壺を打ち碎き金成取り出を可し  
既ニ純金と作りたり但し其鑪壺成打ち碎  
のを全く置きて再び用ひんと欲せハ此を火  
より下を以前ノ錢臼を取て少く温免内ニ油成  
塗り置き此中に化金成鑪壺より移を可し移し  
たりハ錢箸成以て其冷定より追ハ臼の縁を敲



く可し冷定志しハ其金取榘と以て其上  
面よ着きたる滓と打ち放ち除き去る可し此れ  
みく丸を皆精純しゆなり若し又此よア  
ンチモニヤ或ハ他の金石の類混着して十分  
よ精純かきさると此ハ又法何り左ふ説て

又方

再ハ此成鑪壺よ投入し武火よ上せ鎔化して  
も尚一小時の間ハ火上に置く可し然ると此ハ此

よ混交したるア  
ンチモニヤ或ハ他の金石焼  
て煙と成て消散し或ハ滓と成て上面よ浮むる  
至能く冷したるハ其滓除き去る可し

又方

再ハ金成鑪壺よ入せ武火よ上せ鎔化したるハ  
金乃三倍不との硝石を取り此成徐々よ加へ火  
成強くして煮ると時久しく壺中に煙氣絶へ化  
金精潔よ見ゆる成度として火より下し而志く



前法の如く、鍍白を移し、冷定せし後、追々白の縁を  
敲き、よく冷したるハ其滓を除去し去り、洗ひ灌ぎ  
乾し可し、金全く純精なる有り、而後、再々此  
を掛け試む可し、混和したる不潔の物は、消除し  
たり、其分量は知るなり。

金銀銅相混したるは、分離せむの法ハ、既に別の  
分離法<sup>ユエササレ</sup>の條下に説きたり、然れども、爰ハ尚銀を  
分離せむハ、一法、或記を益し、都ての法ハ、強水ハ

銀を投入し、化去し、此は銅の蒸露罐に入し、分離  
せむ<sup>以て註は</sup>、或記を益し、都ての法ハ、強水ハ  
銀附着して、容易に分離を可らざるハ、此の患あり、故に  
此を蒸露罐に入し、最初強水は、鎔したるを、此  
其強水の中は、於て此を寄せ集むるは、良しと云  
此を寄せむるハ、其銀を入し、化したる強水を、壺  
に入し、微火の上、強水の乾く迄、此を煮る可し、  
強水既に消散して、乾きたるハ、水は投入し、而して



て其銀を取り器に入き其上は錢と水銀と投  
入して二三日の間静置置く可し然ると其ハ其  
銀は深きところ強水の気ハ錢に吸ひ集り銀ハ水  
銀と交る故に其水銀中なるハ純銀なり而後其  
水銀取て皮袋に入き押し絞ると其ハ水銀ハ  
外は漏き銀ハ内は存す此銀又鑪壺に入き煮  
るときハ乃其水銀の餘分消散して全き純銀と  
あるなり

蒸煨して金は精純となす法なり即瓦罏の粉末  
及鹽粉各等分を交和し酢液を加へ濕し此は鑪壺  
の半まで納め其上は打延へたる金を置き其上  
は金粉を入れ又其上は延へたる金液置り又其  
上は金粉を入き斯の如く金粉と延へたる金と  
相互に納め鑪壺は充たし免蓋を覆ひ其の漏き  
さる様は蓋の周りに紙塗り塞き火の上せ煨くと  
一晝夜然ると其ハ金は混交したる不清異質乃



物ハ皆焼散し獨り金のこ其中ハ残る但し此法  
ハ銀ハ用可らず九折製純金法種々ありと  
いへとも就中前件所謂「アンチモニア」を以てま  
る或最上法とす毎ハ全き精潔の純金と爲るな  
り

### 銀器上塗金粉分量法

秤取り其一方の皿ハ渡金したる銀器を載せ  
又其一方の皿ハ常汁銀液入きて平衡同等な

らし欠置き而後ハ桶に水液入る此中ハ右の皿  
二つ共ハ一時ハ入る可し水中にてハ渡金した  
る銀器の載りたる皿必深く沈み強く傾く可し  
此時軽くなりたる一方の皿ハ純金液加へ入る  
水中ハ於て再び其平衡同等ありしむる可し其  
あきに同等も追加へ入れたる金の分量即其  
一方ハ載せたるか如き器ハ渡金すしハ用ゆる  
金の分量あり又其一方ハ載せたる銀器を以前



よ渡金せし時用ひし金の分量とあきと同等れ  
ると知る可きなり但し其秤ハ最も製の精密な  
るは用う可し

### 製顔料金粉法

金錢は取て鹽製の王水中に投入し此を微火に  
上せ其王水の半分に至るまで此は蒸散せしむ  
可し而後火より下し冷濕なる土中に埋れ翌  
日の夕よ至て取り出を可し金必皆束針様をな

す此は取て又蒸露罐にて製し取られたる酢の中  
に投入して溶化し再び此は微火に上せ徐々  
に蒸散せしむるを凡其原の半分に至る此を又前  
法の如く土中に埋れ束針様をなすしむ此は取  
り出して雨水に投入し解化せしむ微火に上せ  
其水の半分に至るまで蒸散せしむ而して又此  
は土中に埋れ又束針様をなすしむ此を取て顔  
料をなす蓋し此は用ふるに凡ハ細密に磨り潰



一硬く煮たる卵白小交へて冷濕なる處に置く  
然ると此ハ自のり皆化して油と成る此油を以  
て琢きたる銀器を薄く塗り漸く干す干すと此  
ハ甚美よして渡金したるの如し

不假火力鍍金於銀器上法

一二の金錢を取て薄く打延ハし自註ては良し  
此を凡其二倍不との王水に投入して解化し其  
上は金と同分量の精潔なる硝石を加へ共は化

を皆よく解化志しハ淨清の細密ある綿布を  
其中に浸し且此を以て攪勻し而後其綿布を引  
き上げ微火にて乾を可し乾く乾きたらハ此綿  
布を鑪壺に入し程より火に上せ蒸煨を可し壺  
中ハ紫黑色の粉末残るべき則ち金粉なり此を用  
て銀器に渡金するなり渡金せんと欲するや此  
ハ預て其銀器を乾く置き置其上は此粉末を貼  
多指頭を以て強く磨を可し銀器自のり金色と



なす此を左の記を水茶を以て洗ひ濯ぐ可く精  
潔美麗となるあり

鍍器生光澤水茶法

硫黄十二錢明礬四錢硃石及アニチモニヤ各五  
分共々皆交和し搗きて細末と爲し而後小便を  
取り壺に入れ煮て其上より浮む泡を除去去り此  
より右の粉末を投入して共々煮る可く而後此  
中より渡金器を漬り置くと此ハ金色自り

美麗なる火力を以て渡金器を煮ると此水中より  
漬り置くと此ハ美色成るなり尤も此を煮り  
取り出したるとハ總て皆其上を狼牙を以て磨き  
可く光澤を生ずるなり

淡色金を黃色法

綠青を取て細末より搗き酢を加へ蝕く此を攪勻  
し以て淡色の金器を塗り火より煨り而後此を  
小便の中より投し冷まし可く色美麗をなすあり



又方

葡萄酒石綠青鹵砂各細末ハ搗きて酢ハ加へ此  
中ハ金ハ器ハを漬け以て煮る可ハ色既ハ美ハとなり  
たハ此ハ火ハより下ハ器ハと取り出ハ可ハ此ハ法  
亦良ハ

古廢金器鮮色法

清水ハ陶器ハみ入ハ此ハ少ハく強水ハを加ハ可ハ  
而後ハ古廢ハの金器ハと取ハて鑪ハ壺ハに納ハめ火ハに燒ハく

可ハ此ハを取ハり出ハして直ハ右ハの調合水ハに投入ハ  
蓋ハ覆ハふ可ハ其水ハ必ハ沸ハ瀉ハをも音ハとなハす此ハ音ハ靜  
まるハ待ハて其蓋ハを開ハき金器ハ取ハり出ハ可ハ班  
垢皆去ハるなり若ハ此ハよハて全ハく脱ハけ去ハらすんハ  
數度此ハの如ハくハあハす可ハ既ハ成ハ了ハて後ハ其色ハ成  
好ハくなハんハを欲ハせハ前ハ件ハ所ハ説ハ法ハに隨ハふ可ハ

又方

氣ハの強ハき灰汁ハを取ハり其中ハ古ハ泥ハ金器ハを漬ハち浸



一置き暫くして後より取り出し強毛の掃毛具ハシで  
以て此を磨り掃らひ清水よて洗ひ灌き而後小  
此城小便中より漬多指頭城以て能く磨を可し其  
後より緑青鹵砂各二錢硝石五分共より皆細末より搗  
泥交和し陶器に納り小便を加へて煮る可し此  
より右の金器を糸城以て結ひて入を暫く煮るべ  
し煮る間ハ屢其糸を引て其色城窺ひ見る可し  
既より色良く着きたらハ其糸を以て引起揚多此

城清水より投して洗ひ灌く可し此を乾起たらハ細  
密の綿布を以て拭ふときハ色最も美麗清潔を  
得るなり

又方

鹵砂より少く硝石を加へ共より小便より投入して  
此城解化し其中に金器を納り煮るも亦良法なり

精潔金器珠玉法



気の強き木灰或ハ蘇蓬の灰汁を取り此中ニ綿  
布或ハ軟柔なる革或浸シ此灰以て金器を磨く  
可シ又其器屈曲細線等有りて布革の及ハ至る  
可らざる處ハ掃毛具ニ此灰汁或着多取り以て  
其屈曲細線の處を磨く可シ垢汚悉く去るなり

又方

硫黄四錢金剛砂八錢共ニ搗て細末とれシ又此  
灰肌密なる石盤ニ於て磨く至極の細末なり此

と軟柔なる革ニ着多以て金器或ハ玉石の類或  
磨を可シ但シ革ニ磨を可らざる細き筋等あ  
らハ掃毛具を取て此ニ其粉末と着多以て磨く  
可シ美麗とるなり前法の灰汁或以て垢汚を  
除き去りたる物を尚又此粉末ニ磨くと此ハ  
益其光澤或生むるなり

又方

マルメルステーン按シ石名なり肥後及燒きた  
小産する白石の類



る牛骨を取て共ニ搗レ細末となシ前法ノ如ク  
ニ用ニ可シ最モ良ク光澤ト生セ可シむルなり

### 復金筵緑金繡之色法

金筵緑或ハ衣服ノ金繡等久シ用ヒてモ金  
色ハ失ヒ白ク銀色ノ如クなる物ハ左ノ法ヲ以  
て再ニ其色ヲ復シ新製ノ物乃ハ如ク小ヲ為ス可シ  
蓋シ紫ノ鉚ノ麟ノ金麒麟血各五分共ニ粗末となシ焼  
酎ヲ投テ可シ焼酎ノ色自ラ切リ變リて桃色トな

る此ヲ筆頭ニ貼リ以テ其失色シたる金筵緑等  
の上ニ灰塗リ其上ニ火斗ヲ近ク接スるトぬク遠  
くヨリ當テ徐々ニ乾ラ可シ乾クとレ泥ハ色  
初ニ免ス後ニて殆ンと新製ノ物ト如ク  
若シ少シノ失色ナらハ唯海鯨ノ筋及硫黄ヲ取テ  
共ニ細末トなシ柔毛ノ掃毛具ヲ貼テ以テ其上  
灰磨リて良シ又銀筵緑ヲ海鯨ノ筋ノ細末ノ  
みヲ用テ良シ



燒笹緑取金銀法

久しく用ひて古廢したる笹緑の金銀を少も消滅せざる様ニ燒き取るには其古廢の物或多く集り新き土壺に入き蓋を覆ふひ火の上せ一二小時の間燉く可し而後火より下し清潔の器に移し其上に清水或投して其黒色なる物を洗ひ灌き去る可し金銀ハ其底に沈むなり此或取里乾らす可し又此金銀を一塊とれきん小ハ鑪

壺に入き少しく崩砂を加へて火の上せ鎔化せしめて後錢器に移す可し但し金と銀と相合し一體となりたるハ強水に漬ち浸せハ自り相分別するあり

鎔化金銀簡易法及移動鑪罐不附着壺底法  
金銀或容易に鎔化せしめんと欲せハ少しく崩砂を加ふ可し又此或移動するに及て少も鑪壺に附着し残らざる様にするにハ番屋青蠟脂油



を取て共々微火にて鎔化し紙にて漉し此液鎔  
化したる金銀を移動す時小臨て其鑪壺中  
投を可し燒ちて炎となら其燒けて猶火液を  
る間ニ化金を鑪壺より移動を可し少も鑪壺  
附着するをれ皆速に出るなり

### 重金量法

新し死馬糞を取て汁液絞り出し其中ニ金錢或  
ハ金器の類液漬ち浸し置く可し其量必重くな

るあり

### 製金泥法

金箔を取て蜂蜜に入其細粉とららまで磨り  
粉末とならたらハ此液別器に移し入其此上  
清水液投入して能く攪勻を可し金粉其底ニ沉  
きたらハ其上清液去り又新ニ清水を入其攪勻  
を可し而して其金粉底ニ沉きたらハ又其上清  
液去る可し斯の如く幾度も其水の清潔ニ見ゆ



砥道水飛し而後其金粉採取此を強水中に  
投し二宿の間おれに浸し置く可し其後其強  
水取捨て去りて金粉を乾し此を貯へ用也可し  
蓋し此取用て書畫せんと欲するときは此の脂取解  
化したる水と交和を可し銅箔を以て金泥取偽  
製を可きなり銀泥取造るの法も製金泥法と同  
し尤も銀泥の強水と投入するは及りす

又方

アラヒヤゴに取て水と化し適宜の濃きは  
し其中に細末の硝石又ハ鹵砂取加へ磨り交へ  
允ち密の濃きよなり此中小金箔或ハ銀箔を入  
れ細末となし此を磨り既し能く細末となり  
たらしハ赤色を陶器に移し其上に温水取入を誦  
み日熱湯ハ能く攪勻し密なる綿布を以て此取  
別器に流し入き不潔の物を除き去る可し其上  
に清水取投入し金粉能く其底に沈みたるハ其



上清或他の器に移し合る可し但し赤色其上清  
にも金粉毎に混交したるハ好り而して又其上  
小温水と投して攪勻し金粉能く其底沈みたる  
ハ又初の如く上清を合る可し斯の如く金粉の  
美潔よなるまで數度水飛し而後此液貯へ用  
ゆるあり

紙革上設金色書畫法

水晶或取て極末に搗り磨し此に脂を解化した

液水或投しよく攪勻し此を筆頭は貼し紙上或  
ハ革面は書畫し能く此液乾らして後金片を以  
て其上に強く二三度も研磨を可し其設を記し  
たる書畫自ら金色と好るなり但し右の脂液  
解化を水にサアラシ液加へ黄色になし置き  
此を用ゆるとハ金色益好きを得るなり

用金漆硝子為血紅色顏料法

金箔或取て王水に溶化し又別器に王水と入る



置此此まゝは諸厄利亞産の佳品の錫成浸し解  
化を而後一箇の器小蓋露罐にて引きたる水  
を入此水中右の金を化したる王水二三滴  
成入れ又其上錫を化したる王水二三滴を入  
れ互ひ違ひ此と滴入す候とき其水色自の  
ら変して濃紅色と成此を時久しく静め置く  
と成其底は粉末沉着を可し此成数度水飛し  
て後貯し可し珠玉偽製をると成此成硝子に加

ふきハ美麗の紅色ロベイン石の如き成得るな

且詳し製硝子法の條下を示す

又金の成王水に化し錫ハ解化せず其儘に用  
ても良し蓋し右に云ふ如く清水に化金の王水  
成入き而後一片の錫を入るな何んとお  
まハ清水に化金の王水を入るや成其水黒色  
に變を此に一斤の錫成入き暫く置くと成ハ漸  
くに變して紅色と成まハなり但し色既に適宜



と得たりハ直小其錫ハ取り出を可

漆錢為金巴法

金箔硝石明礬食鹽各等分と取て共小細末とな  
し器小入を其上小水或投入し武火と以て煮熬  
を可し煮熬をると此ハ黄色なる鹽の如き物其  
底小着く若しあれり全く黄色ならざるはと此を  
又水を入を再此或煮熬を可し既小黄色とな  
るはたらし其上小佳品乃焼酎を投入を可し益黄

色と好なり此中小能く琢きたる錢器と漬者  
浸し置く可し自のら羨麗の黄金色とするなり



